

神戸がチーム創設29年目で初優勝

Jリーグ1部

Jリーグ1部（J1）は11月25日、各地で第33節を行い、ヴィッセル神戸がホームの神戸市で名古屋グランパスエイトを2-1で下し、チーム創設29年目で初優勝を決めた。勝ち点を68に伸ばし、連覇を目指した2位の横浜F・マリノス（横浜M）に勝ち点4の差をつけて最終1試合を残して栄冠を手にした。横浜Mは最終戦で勝って勝ち点3を挙げても神戸に追いつけない。神戸の国内主要タイトルは2019年度の天皇杯以来2度目。



神戸一名古屋。後半、ゴール前に攻め込む神戸の大迫選手（中央）

これまでスペイン代表選手だったイニエスタやビジャら世界的な選手を補強し、スペインの名門バルセロナのような強豪クラブを目指してきた神戸だが、J1のリーグ戦では21年の3位が最高だった。しかし、昨シーズン途中に就任した吉田孝行監督は、バルセロナのようなパスで細かくつなぐサッカーをやめ、ボール奪取から速攻を仕掛ける戦術に変更。走力があってボールの奪い合いに強い選手を起用し、失点を減らして得点を増やした。大迫勇也、武藤嘉紀、山口蛍ら日本代表を経験した選手の存在も大きかった。



初優勝を果たし、喜び神戸の選手ら

1994年、川崎製鉄サッカー部を母体にスタートした神戸。95年1月17日に阪神大震災が発生し、地域の甚大な被害によりチームも苦しんだが、29年目ついにJ1の頂点に立った。兵庫県で育った吉田監督は「クラブとしても（この地域に）勇気や希望を与えられる存在になりたい」と話した。

鍵山選手が優勝、2位の宇野選手と大接戦

NHK杯フィギュア



男子シングルで優勝した鍵山選手（右）と2位の宇野選手



女子フリーで演技する青木選手

フィギュアスケートのグランプリ（GP）シリーズ第6戦、NHK杯は11月25日、大阪市内で各種目のフリーが行われ、男子はショートプログラムの鍵山（SP）1位の鍵山優真選手がフリーで2位にとどまったが、SPとの合計得点では288.39点で3年ぶり2度目の優勝を果たした。SP2位の宇野昌磨選手はフリーで1位だったが、合計286.55点とわずかに及ばず2位に終わり、3連覇を逃した。鍵山、宇野両選手はGPシリーズの上位6人で競うGPファイナル（12月7日〜10日、中国・北京）進出を決めた。鍵山選手は演技後に合計得点でわずかに上回ったのを見届けると、こぼれていた表情をなごませ、「とにかく自分のやるべきことにしっかり集中してやるうと思うていた」と笑顔で話した。

女子は、GPシリーズ初出場の青木柚奈選手が5位、三原舞依選手が8位、樋口新葉選手が9位。アバマリ！ジグラー選手（米国）が優勝した。

ペアの長岡柚奈選手、森口澄士選手組は8位、アイスダンスの小松原美里選手、小松原尊選手組は9位だった。

細谷選手が日本勢最高の4位

福岡国際マラソン

福岡国際マラソン2023は3日、福岡市の平和台陸上競技場を発着点とする42.195キロのコースで行われ、細谷恭平選手が2時間7分23秒で日本勢最高の4位に入った。ケニア出身のマイケル・ギザエ選手が2時間7分8秒で優勝した。

頭グループで頑張ったが、最後に競り負け、パリ五輪男子代表の最後の1枠を争う「マラソングランドチャリオンシップ（MGC）ファイナルチャレンジ」の設定記録（2時間5分50秒）には届かなかった。



35キロすぎ、先頭集団を走る細谷選手（右）と優勝したギザエ選手（左）【代表撮影】

細谷選手はレース終盤まで4人による先頭グループで頑張ったが、最後に競り負け、パリ五輪男子代表の最後の1枠を争う「マラソングランドチャリオンシップ（MGC）ファイナルチャレンジ」の設定記録（2時間5分50秒）には届かなかった。

10月のMGCで転倒して途中棄権した細谷選手は、幸いにも軽傷で、この大会に出場できた。この結果について「まだまだ努力が必要。（自己）2番目のタイムが出たことは、次に生きるレースになった」と話し、五輪代表はまだあきらめていないことを示した。

MGCファイナルチャレンジの男子指定大会は来年2月の大阪マラソン、3月の東京マラソンが残る。設定記録を上回る選手がいなければ、MGC3位の大迫選手が五輪代表となる。

高木選手が1500メートルで優勝

スピードスケートW杯開幕戦

スピードスケートのワールドカップ（W杯）は、2023年〜24年シーズンの開幕戦が11月10日から12日まで北海道十勝オーバルで開催された。



男子1500メートルで滑走する山田選手

女子は、高木美帆選手が1500メートルで1分54秒54をマークして優勝した。昨年の北京五輪で2位に終わったこの種目に力を入れてきただけに、「爆発的なタイムではなかったが、最低限のことはできた。なるべく守りに入らず、チャレンジしたい」と話した。



女子団体追い抜きで滑走する日本女子。右から高木、佐藤、堀川の各選手

北京五輪で金メダルを獲得した1000メートルは2位だったが、堀川（ベネチア）は、山田将矢選手が1000メートルと1500メートルの2種目で優勝。500メートルの1レース目は、新浜立也選手が34秒52で1位、森重航選手が2位、村上右磨選手が3位となり、日本勢が表彰台を独占した。500メートルの2レース目では森重選手が快勝した。